

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 3 号

平成 2 1 年 5 月 1 4 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

| 区 分 | 農 作 物 名 | 病 害 虫 名 | 発生時期 | 予想発生量 |
|------|-------------|---------------|-------|-------|
| 普通作物 | イ ネ | いもち病(葉いもち) | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | 縞葉枯病(ヒメトビウンカ) | 平 年 並 | 少 ない |
| | | ニカメイガ | 平 年 並 | 少 ない |
| | | イネミズゾウムシ | - | やや少ない |
| 果 樹 | ナ シ | 黒斑病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | 黒星病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | ハダニ類 | やや早い | やや多い |
| 果樹全般 | アブラムシ類 | 平 年 並 | 平 年 並 | |
| | カメムシ類 | 平 年 並 | 平 年 並 | |
| 野 菜 | スイカ | 菌核病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | つる枯病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | うどんこ病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | スイカ、メロン | アブラムシ類 | やや早い | 平 年 並 |
| | | ハダニ類 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| シ バ | 葉腐病(ラージパッチ) | 平 年 並 | 平 年 並 | |

気象予報 (抜粋)

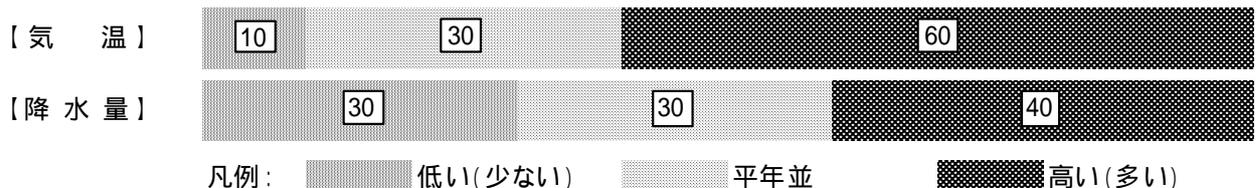
1 か月予報 (5 月 9 日 ~ 6 月 8 日 : 5 月 8 日、広島地方气象台発表)

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

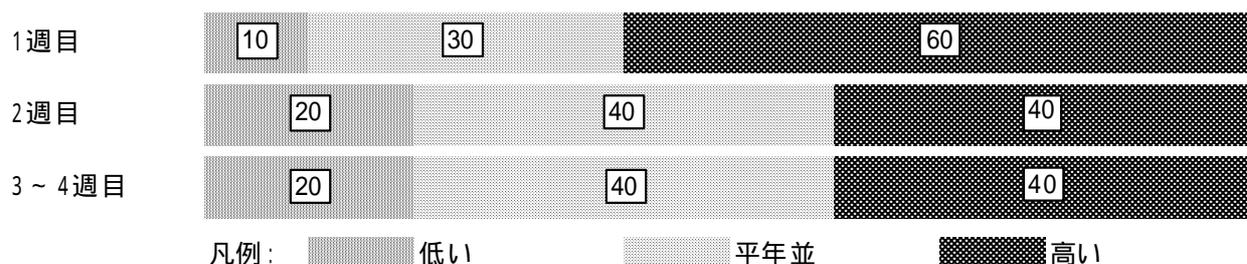
天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう 1 か月の気温は、高い確率 6 0 % です。週別の気温は、1 週目は高い確率 6 0 %、2 週目、3 ~ 4 週目は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量の各階級の確率 (%) >



< 気温経過の各階級の確率 (%) >



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病 (葉いもち)

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 平年並 |

(2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は平年より少なく、種子の保菌率は低いものと見込まれる。

イ 4月下旬～5月上旬の気象条件、向こう1か月の気象予報は、苗いもちの発生にやや助長的である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 種子消毒を徹底するとともに、種もみが露出しないように覆土を行う。

イ 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。

ウ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

エ 県内広域で、シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤 (ウィンアドマイヤー箱粒剤、デラウスプリンス粒剤10など) の耐性菌が発生しているので、当該薬剤の使用を控え、代替薬剤を使用する。

オ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回りなどを行い早期発見に努める。

カ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

2 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 少ない |

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報より、ヒメトビウンカの発生時期は平年並と見込まれる。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

県東部などの常発地では、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 少ない |

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報より、本虫の発生時期は平年並と見込まれる。

イ 昨年の第2世代幼虫の発生量は少なかったため、越冬量は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが、発生が増加している地域がみられているので注意する。常発地では、本虫に対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

| | |
|------|-------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生量 | やや少ない |

(2) 予報の根拠

ア 5月6日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 5月12日現在、県東部の早期(4月下旬)田植ほ場への侵入は既に認められているが、被害程度は平年に比べてやや軽い。

ウ 前年の第1世代成虫の発生量はやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。

ウ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、粒剤などで防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における開花期以降の胞子飛散数は平年を下回った。

イ 4月28日に行った県内15園の巡回調査によると、幼果のポリ袋検定法による発病果率は2.6%（平年：1.8%）とほぼ平年並であったが、一部のナシ園では発病果率が平年に比べて高くなっている。

ウ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、平年に比べてやや低いが、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに胞子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は胞子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1，500倍液、有機銅フロアブル（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍とポリオキシシンAL水和剤1，500倍の混用液、ポリベリン水和剤1，500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。

ウ スピードスプレーヤによる防除地域では往復又は縦横走行を行い、手散布地域では散布むらのないように丁寧に薬剤散布を行う。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県内全域の一部のナシ園で葉や幼果への発病が認められている。

イ 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における開花期以降の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年を下回った。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、ジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル)500倍液、チウラムフロアブル(トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル)500倍液、有機銅フロアブル(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、平年より4日早い4月20日(平年:4月24日)であった。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)におけるカンザワハダニ、ナミハダニは平年並、クワオオハダニはやや多い発生となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が多い園では、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第2半旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)におけるワタアブラムシの寄生新梢率は1.0%(平年:13.0%)で、発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、アブラムシ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液又はウララDF4,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルの使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年1回の使用とする。

[果樹全般]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップの誘殺数はチャバネアオカメムシ、クサギカメムシともに平年並~やや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の発生時期は、ほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

カメムシ類の発生が認められる園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病はやや低温（15～20）で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000～1,500倍液などを散布する。

ウ ハウスでは、スミレックスくん煙顆粒6g/100m³又はロブラールくん煙剤100g/300～400m³などを使用してもよい。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。トンネル栽培のスイカでは、茎葉に雨がなるべくあたらないようにトンネルを開閉する。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25 前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 既に発病のみられるほ場では、パンチョTF顆粒水和剤2,000倍液、トリフミン水和剤3,000~5,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリペリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量は平年並である。また、現地ほ場におけるワタアブラムシの発生量も平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果2週間後までに発生した場合は、DDVP乳剤50の1,000倍液、その後の果実肥大期にはアトマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。スイカのトンネル栽培では、ツル引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤2,000~4,000倍液、着果後にアトマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。メロンではチェス顆粒水和剤5,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)及び現地ほ場におけるハダニ類の発生はみられず、平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は今後も平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア スイカ、メロンともに、発生初期にニッソランV乳剤1,000倍液、パロックフロアブル2,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液などを散布する。

イ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤の使用は避ける(ミツバチへの影響日数7日)。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、生産芝での本病の発生は、一部ほ場で部分的に見られるが病徴は停滞している。

イ 本病は降雨によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

本病は、発病前の薬剤散布を基本とするが、既にパッチがみられる場合は、発病部位を中心にバリダシン液剤5の500倍液0.5～1L/m²などを、スポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、6月4日(木)の予定です。